

類に就ても簡単な記述がある。卵及胚の滲透壓と透過性に関しても一章があるが、この章は文献の渉獵が少なく且つ著者等の海産硬骨魚卵に關する仕事は卵膜(Chorion)と卵表層の透過性を區別せずに論じて居る爲に妙な印象を與へる。最後に結論及び將來への示唆を與へて居るのは頗る有意義である。又附録として研究方法が述べられて居る。

通覽するに從來の滲透壓調節機構の外に汽水及淡水動物が體腔液よりも遙かに低調な外界から鹽類を吸収する現象が強調されて居る。滲透壓調節は動物體に於ける生理的三大調節の一つであるのは言ふ迄もない。この分野に關する業績も著者の如き巨匠の手によつて纏められたことは欣快とする所である。

最後に本邦の學者の業績もかなり引用されて居ることは喜ばしいことであるが、中にはあり得べからざる結果として數理的に指摘されて居る研究もある。(山本時男)

シャラー著
懸田克躬譯

腦 髓 の 構 造 と 機 能

昭和 16 年 4 月 創元社發行
225 頁 定價 1.80 圓

本書の原著 Ernst Scharrer: Vom Bau und Leben des Gehirns に就ては筆者が以前本誌に紹介する處があつた。此書は Verständliche Wissenschaften なる通俗科學叢書の一つとして著された手頃なものだけに、何れ日本でも類似の科學叢書が刊行された際には、これが翻譯が企てられて然るべきものと考へ又希望もしてゐた。果して今回これが實現して、創元科學叢書中に加へられたことは我が意を得たりと喜んでゐる。此機會に、編輯委員のお勧めのままに、改めて本書を紹介するのは筆者の義務でもあらうか。

僅か 200 頁餘の小冊子に腦の發生、解剖、生理と一通りの體裁を整へ様と努力してゐる。尤も斯る企は誰か試みても危険なことであるが、その危険を敢へて犯した處に本書の價値がある。従つて“他の部門に就ては充分の教養を持ちながら、一體魚類には腦髓があるだらうかと問うてみたり、又或は人間の腦髓は脂肪體の一種である等と主張してみたりする人”を相手に書いてみながら、“専門家のみが通曉し得る”種類の叙述も決して尠くないことを擧げて、著者を責めるのは酷であらう。

章を改めること 8 回、先づ神經系統の發生から始め、次いでその構築材料及び研究方法に及び、これ等の基礎の上に無脊椎動物を展望し、更に進んで脊椎動物を下から迎へ、と云ふ極く常識的な順序を追つてゐる。平易にして而も安易に墮さぬ記述態度は、“生活の科學化”、“科學の素養化”の標榜に、蓋し適切なものと言へる。併し著者が神經病學者であり、主として人腦の組織病理學的研究に従事してゐる關係上、人腦の解剖、病理、精神異狀等に比較的詳しいのに比し、生理に關して聊か記述の不足を感ずるのは止むを得ないと云ふべきか。要するに、腦解剖學の概括的知識に加ふに腦の生理並に病理の常識を得る目的には秀れたものの一つに算へられよう。

譯者懸田醫學博士は筆者の友人であり、その翻譯に當つても一二相談に與つた關係もあり、譯を賞めるのも如何かと考へるが、併しそれだけに、翻譯には周到にして良心的であつたことを知つてゐる。譯本には避けられないあのギョチナサと臭みの左程強くないのは譯者の素養を物語るものであらう。挿圖を全部原書から採りながら、その説明文字を日本語にしてある邊りは、その努力に敬意を表し度い。術語は總て標準語彙を用ひてゐるので感じが頗る新鮮である。ただ商策上出版を急いだため校正が不充分で、字句・文章の不統一、誤植・脱字等が尠くないが、それも讀者を謬らす程度でないのは幸である。(武部啓)

高木俊蔵

細

胞 (教養文庫)

昭和 16 年 弘文堂
164 頁 50 錢

動物の細胞を對象とした本格的な著書は我國ではまだ書かれてゐないのでミトコンドリア學者高木氏の著書が現れたことは、たとへ本書が“要點を平易な形に呈示する”ことを目的とする小冊子であるとしても我々にとつて喜ばしいことである。序文で“細胞學の現況は核、染色體の研究に重點を置かれ細胞質は